

音 楽 科

1 育成したい「思考力」

- a 感受する力：音楽を形づくっている要素や、そのかかわり合いから生まれる曲想を基に、音楽の情景を想像する力
- b 表現を工夫する力：音楽から想像した情景と結び付けながら、音楽を形づくっている要素や、そのかかわり合い方を、自分の思いや意図をもって創意工夫する力

新学習指導要領において、表現及び鑑賞の活動の支えとなる指導内容が〔共通事項〕として新設された。そこでは、音楽のよさや面白さ、美しさを感じ取る際に聴き取るべき音楽の要素が明確に示された。

そこで、本校音楽科では、その〔共通事項〕に示された音楽の要素を基に感受したり、表現を工夫したりすることを重視し、そこで必要とされる力をまとめた。それが、この「思考力」である。

a 感受する力

音楽は、リズムや音色、強弱などの様々な要素により形づくられている。そしてこれらの要素のかかわり合い方によって独自の構造をもち、それが楽曲に固有の曲想を生み出す。



これら楽曲の独自性を基に、そこから情景を想像する力が「感受する力」である。このように「感受する力」とは、音楽的な刺激を受け取るという受動的な面に留まらず、その刺激に対して自分の心象を形成するところまで含めて捉える。

また、実際の学習においては、「リズムののりがよくて、踊っているような曲だなあ。」と音楽を形づくっている要素から情景を想像することもあれば、逆に「お祭りのような曲だなあ。」と最初に情景が浮かび、続いてその根拠となる要素を聴き取っていくこともあろう。感受する力は、このように音楽の要素と情景の双方向を行き来しながら高められていくのである。

b 表現を工夫する力

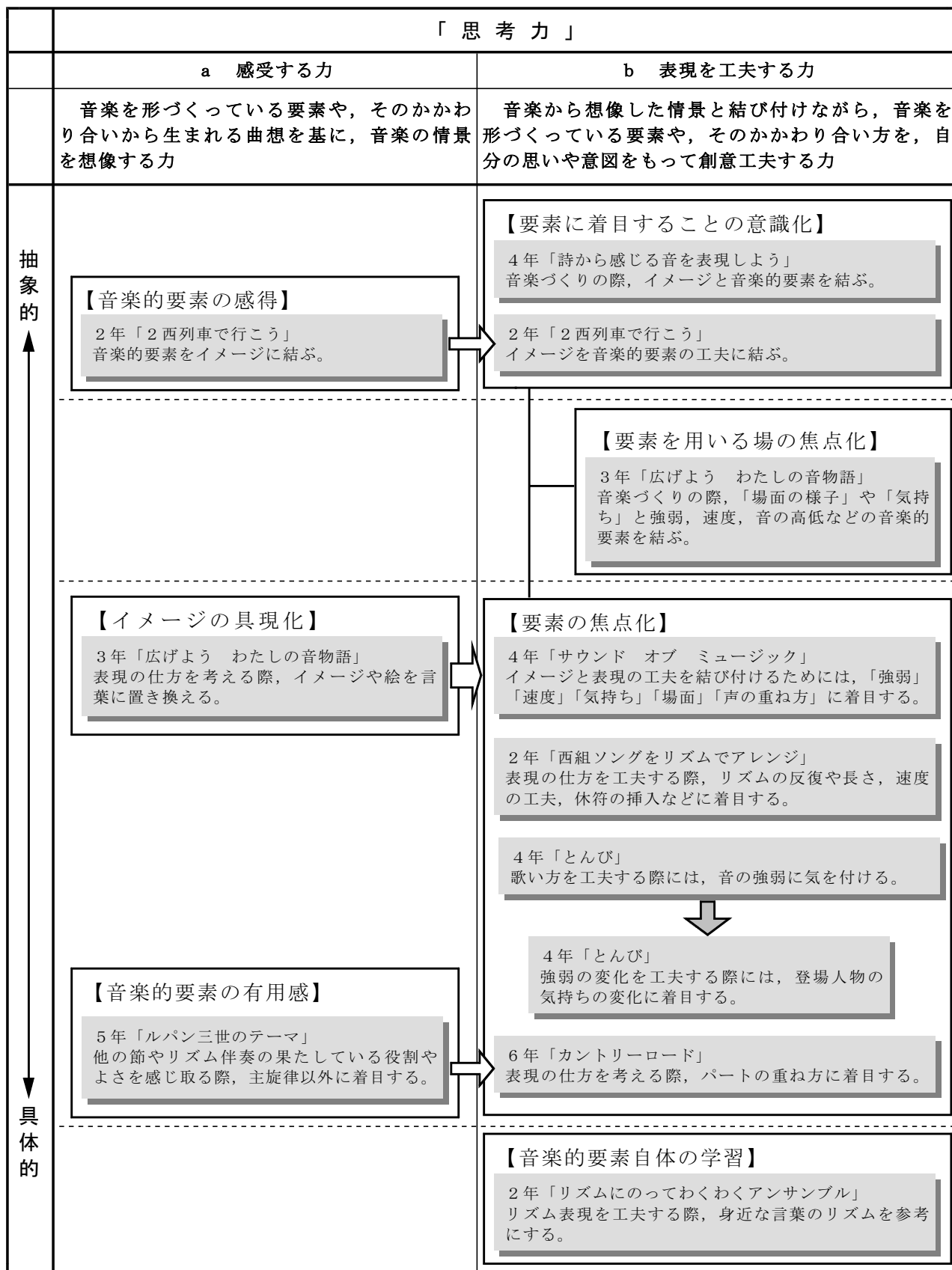
既存の楽曲の演奏を工夫する際には、自分の思いや意図を明確にもつことが求められている。そして、その思いや意図に合った表現をするために、音楽を形づくっている要素や、そのかかわり合い方を創意工夫するのである。

具体的には、例えば「速度の工夫」のように要素自体を工夫することもあれば、「旋律の呼応」のように単一要素のかかわり合い方の工夫、さらには、「旋律とそれを演奏する楽器」のように別の要素のかかわり合い方の工夫もある。

なお、この「表現を工夫する力」は、上で述べた「感受する力」に支えられていることは言うまでもない。情景を想像することで、「このような音楽にしたい」という思いが一層強まるからである。また、音楽を形づくっている要素が、楽曲にどのように働きかけるかを感じ、理解していなければ、要素を選んだり組み合わせたりすることもできないからである。

2 「思考力」を育成するための思考様式

(1) 思考様式の分類



※ これらの思考様式は、実践の一部であり、全てを掲載しているものではありません。

（２）分類から明らかになったこと ～ a, b 両「思考力」から見る実践の方向性～

これまでの実践で有効性を認められた思考様式を、音楽科で育成したい「思考力」に基づいて分類し、両「思考力」のつながりと、それぞれの系統性を考えてみた。その結果、次のような点において、これからの実践の方向性が見えてきた。

① 両「思考力」のつながりについて

先述したように、「表現を工夫する力」は、「感受する力」に支えられている。「感受する力」が育ち、音楽から豊かに情景を想像できるようになるに従い、「こんなふうに歌いたい」という目的意識が強化されたり、「こういう演奏もできるよ」と表現の幅が広がったりするのである。

今回の思考様式の分類により、前ページの分類図において３箇所、関連を見出すことができた。このように、**表現を工夫する活動に先立ち、当該の音楽的要素がもつイメージを豊かにしておくことが、その後の表現の工夫に有効に働く**であろう。

また、表現を工夫した際、その歌唱や演奏が情景を表すためにふさわしいかどうかを適切に判断できるようにするのも、「感受する力」である。なぜなら、その評価に際し、歌唱や演奏を基に情景の想像との整合性を判断しているからである。実際の学習においては、**これら両「思考力」を意図的につなぐような働きかけが重要**である。

② 「系統性」について

ア 「感受する力」について

「**音楽的要素の感得**」とは、音色やリズム、強弱などの音楽的要素から受けるイメージをふくらませていくことである。次の「**イメージの具現化**」とは、ふくらませたイメージを言語化することで、イメージと表現との橋渡しをしようとする試みである。最終段階としての「**音楽的要素の有用感**」とは、当該思考様式を用いることで、その音楽的要素のよさを感じ取るようにする段階である。

イメージと表現の工夫の間の隔たりが大きい子どもにとっては、言語化など、イメージを具現する術を知ること、そのギャップを縮めることができるであろう。また、音楽的要素の有用性を感じるようにすることで、その後、表現の工夫をしようとする際、その音楽的要素を使いたいという意欲化にもつながる。

このような「**音楽的要素の感得**」、感得した「**イメージの具現化**」、そして「**音楽的要素の有用感**」という段階を子どもたちの実態に応じて設定していきたい。

イ 「表現を工夫する力」について

子どもたちは、表現の工夫をしようとする際、よく「楽しい気持ちで歌いたい」「踊りながら歌いたい」などのように言う。このような子どもは、具体的な音楽的要素に着目すれば、表現の工夫ができるということに気付いていないのである。

そのような時、分類図に示したような思考様式の段階を意識して取り組めばよいのではないかと考える。

まず、工夫するための着眼点が音楽的要素にあることを意識させる。そして、その後、**それら音楽的要素を用いる場を焦点化したり、要素を焦点化したりする学習を計画する**のである。このような流れを組織することで、子どもの意識は、イメージを表現するための音楽的要素へと滑らかにつながるのはないだろうか。これは、大きく学年間の系統を考える際にも、また年間計画、あるいは単元計画を考える際にも大切な視点となるだろう。